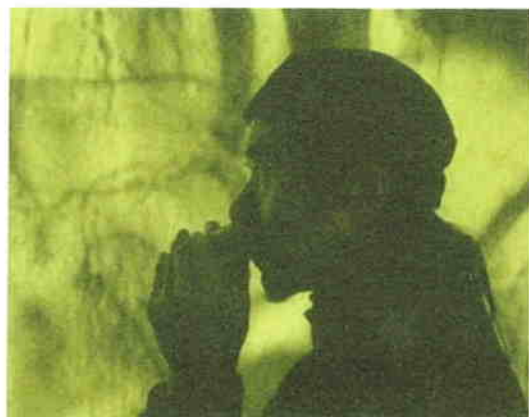


土取利行 古代音楽レクチャートーク & サウンド・デモンストレーション

『縄文・旧石器時代への音の旅』

「壁画洞窟の音」、CD「瞑響・壁画洞窟」同時出版記念スペシャル・イベント

2009年 2月11日 (水/祭日)



土取利行 (つちとりとしゆき) プロフィール

1950年香川県生まれ、70年代、近藤等則、阿部薫、坂本龍一、音楽評論家の間章らと音楽活動を展開。渡米して伝説のドラマー、ミルフォード・グレイブスと出会い、音楽の根源的な探求に導かれる。欧米でスティーブ・レイシー、デレク・ベイラーら海外の多くの即興演奏家と共演する一方、76年より、ピーター・ブルック国際劇団の音楽家として活動。「ユピュ王」「鳥の会議」「マハーバーラタ」「テンベスト」「ハムレットの悲劇」、最新作「ティエルノ・ボカール」まで多くの作品を手掛ける。また音楽の根源を求めてアフリカ・アジアをはじめ、世界各地で民族音楽を渉猟するプロセスは、著作『螺旋の腕』（筑摩書房）に詳しい。80年代より日本先史時代の音楽の研究・演奏へと向かう。古代三部作「銅鐸」「サヌカイト」「縄文鼓」を発表し、各方面から注目を集める。87年より桃山晴衣とともに岐阜県郡上八幡に活動の拠点「立光学舎」を設立し、地元の人たちとの文化活動にも力を注ぐ。近年は旧石器時代の音を探求し、フランスの壁画洞窟内での演奏がNHKで放映され、今年七月にそれらの演奏がCD化。同時にCD古代三部作が新たにマスタリングとデザインのもと復刻新盤として甦っている。また『縄文の音（増補新版）』（青土社）に続き、旧石器時代の音楽論『壁画洞窟の音』を発表したばかり。その他CD、著書多数。

世界的パーカッショニスト、土取利行が十余年に渡って探求、演奏を続けてきた日本の古代音楽の世界。

その成果は1982年よりCD『銅鐸』『サヌカイト』『縄文鼓』として随時発表されてきたが、このたびこれらの各CDが日本伝統文化振興財団より古代三部作として新たなマスタリング(SCM-CD)と新たな装幀(佐々木暁デザイン)で復刻され甦りました。また同時に南仏の旧石器時代壁画洞窟での演奏記録がCD『瞑響・壁画洞窟』としてリリースされ、さらに土取が調査を続けて来た旧石器時代の音楽についての書き下ろしが青土社より『壁画洞窟の音/旧石器時代・音楽の源流をゆく』として刊行されたことも併せての講演+演奏です。土取利行がこれまで演奏してきた古代音楽の映記録やサウンドを交えながら日本の古代音楽、ヨーロッパ先史時代の音楽世界についてご堪能下さい。

『壁画洞窟の音～旧石器時代・音楽の源流をゆく』～あとがきより

旧石器時代は、五〇〇万年とも六〇〇万年ともいわれる人類史のおよそ三分の一を占める長い時代で、遊動と狩猟採集という世界共通の文化基盤の上に成り立っている。そのため旧石器文化の一翼を担う音楽はかなり普遍的特徴を持つと考えられ、世界的視野に立っての研究が必要となってくる。そこでその音楽探究の糸口としてわたしが選択したのがフランスの壁画洞窟であったが、なぜ美術の殿堂に音楽のルーツを求めるとかという単純な疑問を誰しも持つであろう。いわば音楽の研究のために美術館に行くようなものではないかと。わたしも洞窟への一歩を踏み出すまでは、そのような疑問を持っていた。しかし洞窟は美術館ではなかった。それは絵を描いたり飾ったりするためだけに人が作為的に造ったものではない。たまたま現在まで壁画が残っていたためにそこにスポットが当てられただけで、同じ場所で音楽が奏でられていなかったとは誰も断言できない。ましてや絵画や彫刻は美術館で、音楽はコンサートホールでといった種分けは、この時代には無用だった。そこには絵画の発想力を喚起する幻想的な岩のキャンパスが存在し、同時に音楽を生み出す静けさと闇が支配している。すべては自然の建造物であり、壁画洞窟は過去から現在に至るまで音楽に包まれてきたのだ。



会場／ルネスホール 岡山市内山下1-6-20 <http://www.renaiss.or.jp/>

開場／14時00分 開演／14時30分

料金／ 一般前売：2,500円 一般当日：3,000円
(全席自由) 学生前売：1,000円 学生当日：1,000円

チケット取扱い／ぎんざや、ルネスホール(086-225-3003)

ヤマハミュージック瀬戸内倉敷店

主催／プロジェクト Empty Space
NPO法人 EMANON MUSIC

共催／ルネスホール(バンクオブアーツ 岡山)